



本間良二の 第4回 One Size Fits All

知識と経験
目線の角度

Text & Illustration: Ryoji Homma
Photograph: Shio
Design: Kosuke Shono



種をポットに埋めて散水中。鹿除けの柵もちょうどいいが見つかって風景がガラリと変わった。スッキリして気持ちがいい。ダンガリーシャツは、90年代の「J.CREW」。ダンガリーシャツは僕が中学生だった頃の憧れのシャツ。L.L.BeanやEddie Bauer、Ralph LaurenやBIGMAC、RUFF HEWNなんかも、カッコいいブランドはみんなダンガリーシャツを作っていた。やっとならうようになってきた（ような気がする）。ハットは友人のブランド「COMESANDGOES」のもので3年くらい愛用中。



1. 家の窓は浴槽以外、すべて木製の窓になっている。見た目はスッキリしていて気持ちいいのだが気密性にかけるのが難点。「時間とお金に余裕ができれば、ドイツ式のドレーキップ窓にしたいなあ」と、思いながら網戸を交換中。2. 原木シイタケが美味すぎて、クヌギの原木を安く譲ってもらいに近い近くの部落に住む1上さんのクヌギの山でお手伝い。それにしても山で暮らすご年配はみんな達人だなあ。72歳でこの森を一人で管理しているって、マジですか？ なんでもひよひよいと仕事をこなす姿もカッコいいなあ。聞くど力を使わずにモノ持ち上げるコツがあるらしい、自然や道具の知識も豊富で、こういった Mountain Life TIPS を先輩から教えてもらうのも楽しみのひとつ。自分も尾羽うち枯らさぬよう、日々精進します。押し忍！ 3. 仲良くなった林業の友人からの SOS を受けて、家から車で15分くらいの県立公園の仕事を手伝った。林業の花形は伐倒だが、植え付けもとても大切な仕事。竹の刺さっている場所に穴を掘り、掘った穴に苗木を（なんと総数5,300本！を20人ほどで）植え付ける。やり始めて1時間で腰が悲鳴をあげたが、徐々に体が慣れてくる。2日間、朝6時半から夕方6時までのガッツリ肉体労働。久しぶりにいい汗かいて、ちゃっかり残業代込みの日当¥19,000×2をいただく。おじいちゃんになってからこの山を眺めるのが今から楽しみ。4. 山の土地には桜の木が多く植えてある。「ソメイヨシノ」「山桜」「しだれ桜」「上満桜」と咲く時期も少しずつ違うので長い期間楽しむことができた。週末は友人家族が来てお花見をしたり、畑仕事の合間ににぎりに食べながらゆっくり眺めている。5. 畑のそばに道具小屋が欲しくなり、伐倒した杉材で建てた小屋を建てた。ハンゴに登るような作業は道具を近くに置けないので、奥さんに「手許」をやってもらう。この一人がいるだけで作業の進み具合が全く違う。作業中はとくに会話もない。阿吽の呼吸で動く、街の中草屋の夫婦になった気分だ。

今年の春は忙しかった。
こんな忙しなく過ごした春は、いままでになく
らしい。

鹿とイノシシ除けに畑の柵を新調し（2m×1mのワイヤーメッシュを合計で85個購入して設置したが、まだ足りていない）、固定種の種を調子に乗って一万三千円分も買ってポットに埋め、畑には牛糞とくん炭、卵殻石灰と菜種の搾りかす、木灰と米ぬかを混ぜ合わせて畝ですき込み（この作業は1年目のみ）、その合間に山にはびこる雑草を刈り、傷んでいる樹木の剪定といった具合。

雨の日もやることはあって水道の蛇口をアンテイクのものに交換したり、電気のスイッチをアメリカで買ったきたトグルスイッチに交換してみたり、玄関口のプラケットライトを自分好みのものに交換している。ポロポロになっていく木柵の網戸の交換も、夏までにすべてやっておかないといけないし、剥がれた漆喰の壁も補修しないと…

そんな合間を縫って、伊豆のアマチュア養蜂家がくれた蜂蜜をペロペロ舐めながら、この原稿を書いている。

何を言いたいかというと、僕がこの土地を手に入れたということは、同時に山の整理や畑仕事、家の補修などつねに「何かしらの作業」をしながら暮らさなくてはならないということを意味している。

多くの人は「大変だ」、「面倒くさい」と思うだろうが、むしろこの作業すくめの日々を送りたくて仕様がなかったタイプの人間なので、毎日がワークショップのようである。

しかし、安全円滑にことを進めるためには、それなりに勉強も必要なので自然に関する畑や林業はもちろん、電気や上下水道、家の構造など書籍を読み漁り（インターネットは初期の検索だけにどどめて、情報元はやっぱ本。著者や団体名などの記載がある情報のみをインプット）、知識を蓄え、ときには実際のモノを分解して内部構造を理解してから作業を進めている。慣れてくると、一日のうちに農家と林業と水道屋と建具屋を兼用、なんて日もある。

はじめての作業は緊張するし、準備には時間もお金もかかるけれど、作業を終えたときの達成感はないかなかな。

もので、いろいろな気づきもある。

また、その経験によって、いままで見ていた風景が変わって見えることも多々ある。

たとえば、街で立派に咲いている桜の木を見ても、桜の花よりも樹形のほうが気になる。

「立ち枝」や「逆枝」、「下垂枝」や「ヤコ」などが目立つ木を見ると、剪定したくなってくるし、栄養が行き届いていない、弱っている老木を見ると「どの幹を切るべきか？」と立ち止まって考えるようになった（老木は弱っている主幹にたくさん枝が生えたら、その重みで主幹が裂けてしまうことがある。だから、早めにもその主幹を切り落とし、バランスの良い新たな主幹を伸ばしてあげる必要がある。方角などを考慮して、ひとまず3年後くらいの状態を想像しながら剪定をする）。

「いまは立派に花を咲かせているけれど、5年後はヤバイかもな」と、枝ぶりや樹皮を見て、根の状態を想像する。

お花見をしながらこんなふうに見えるのは園芸家が庭師か樹木医か、よほどの数寄者か…

モノの見方には本当に様々な角度があって、その角度こそいまの自分の経験に伴う感性なのだと思わなくてはならない。

どちらにしても、目線の変化によって、いつもの風景が変わっていくのは楽しいので、こちらとしては大歓迎。

このまま知識と経験を積んでいけば同じ桜の木でも、さらにまた違うものに見えるということか。

なるほど…これでは飽きることがない。

こうやって歳を重ねていくのね。

しかし、いままであれだけ時間やお金、移動距離をかけて一生懸命（？）遊んできたというのに、ここに来て生活が一番おもしろいなんて、ちょっと悪い冗談のようにしか聞こえない。

灯台下暗しと、つくづく思う。

本間良二「スタイリスト」2冊共著 The Front Shop 著者
90年代から始めた活動は多岐にわたる。